

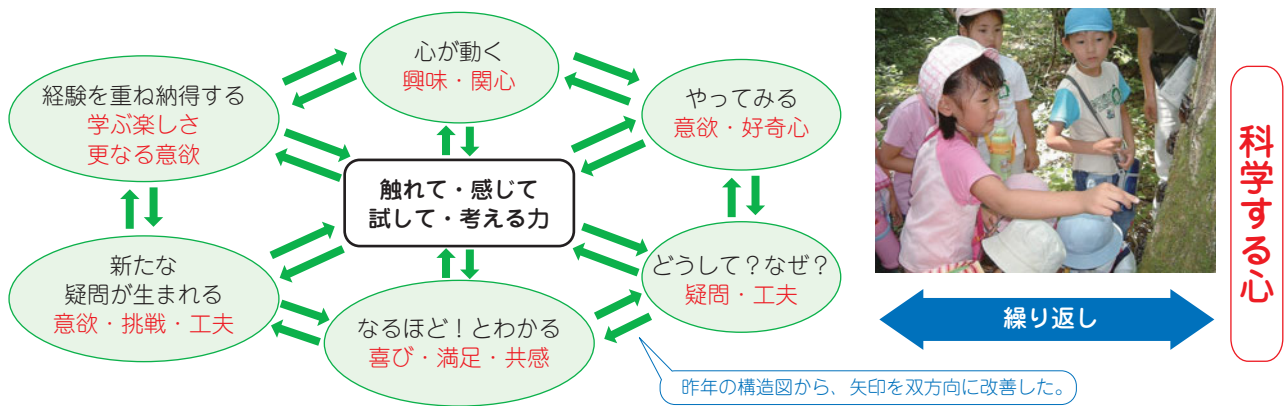
自然事象への興味関心を広げ、『触れて・感じて』『試して・考える力』を育む 学校法人中沢学園 会津若葉幼稚園（福島県会津若松市）

【本園が考える『科学する心を育てる』とは】

子どもたちは、日常のふとした出来事を見たり、聞いたり、触れたり、様々な感覚・感性や身体を使って感じたりしながら「すごい！不思議だ！」「なぜ？どうして？」という驚きや感動、不思議だなという気持ちを持ち、“気付いて、考えて、夢中になって繰り返す”ことを楽しいと感じる。このような経験を繰り返しながら、自分が感じた疑問に試行錯誤し、『なるほど！とわかる』ことに喜びや満足感、共感を覚え、自分たちなりに理解しようとする。

保育者の役割で重要なのは、子どもの疑問や不思議に共感し、それを深める手助けを心がけ、子どもの好奇心・探求心を持続させる配慮をしていくことである。

自分たちの新たな疑問や不思議の謎を探ろうと調べたり、挑戦したりすることで、探求心が育ち、そのことが深い充実感や満足感につながる。それを繰り返すことで、更なる意欲が生まれ、自ら試し学ぶ楽しさ、面白さを味わっていく。このような経験の繰り返しが、“科学する心を育てる”ことにつながると考える。



【研究の手がかり】

幼児期の「科学する心」は直接的に『触れて・感じる』体験を楽しく繰り返し行うことで、感動する気持ちが膨らみ、幼児の自ら『試して・考える力』が育まれていくと考え、園内外での様々な活動を行っている。今回は昨年度からの継続した活動から、不思議さや楽しさを感じ、いろいろな発見や感動、満足感を抱き、自ら遊び学ぶ楽しさ、面白さを十分味わい『科学する心』の育ちが感じられた実践例を年齢毎に挙げ、研究を進めた。

【研究の方法】

1. お日様の力って面白い！

～試行錯誤を繰り返しながら～

<平成 23 年度>

- 5 才児事例① お日様パワー探検隊！
- 5 才児事例② パワーが集まる色は！
- 5 才児事例③ パワーを集めてみよう！
- 5 才児事例④ 熱の力ってすごい！～お日様に似ている力～
- 4 才児事例 ついてくる！消えた！面白い！

2. 凧作り！

～地域の方や異年齢児からの刺激を受けて～

<平成 22 年度>

- 5 才児事例 風の力で高く揚げよう！
- 3 才児事例 凧を作りたい

<平成 23 年度>

- 4 才児事例 凧を飛ばしたい！

以上の実践事例を基に、『触れて・感じて』『試して・考える力』を育むことが「科学する心」の育ちに結び付いていくのか、探ることにした。

ポイント

主題「科学する心を育てる」についての考え方を保育者みんなで協議し、考え方を構造図に表しています。この構造図は、前年度の研究により『触れて・感じて・試して・考える力』につながるキーワードの姿は相互に関係し合っていると共有されたことで見直され、双方向の矢印になりました。このように研究の成果や課題を活かして構造図を見直すなど、把握したことを具体的に示して共通理解を深めることは、保育の方向性を共有して向上を図ることに結び付きます。

「科学する心を育てる」をどのように園で共通理解をしているか

＜幼児教育の現場を改善させる「支援プログラム」研究への取り組み＞ 園長 中澤 剛

近年子育てと仕事を両立させる教諭が増え、共通理解とチーム協力がないと研究担当の引き受け手がなくなります。

少子化が進み学級数減少に伴い教諭数も減り、未入園児の親子同伴の短時間通園、預かり保育など子育て支援事業の増加によって、「ゆとり」が消え全体の協力なしに研究の積み重ねは成り立ちません。

幼児が先生や友達と自由に、思うままに会話を交わし、感じた事や疑問を表現出来る関係、好奇心を刺激する新鮮な環境や適切な支援と指導が準備され、周囲と一緒にの実験や確かめが積極的に、且つ集中して出来る楽しい仕組みが、「科学する心を育てる」のではないかと保育者全体が理解できています。

平均経験年数が伸び、大卒教諭比率が高くなったことにより幼児を見る視点が以前とは少し変わり、保育の方法や内容が「記録・検討」しやすい様に変化してきたことにより、引継ぎを前提にした記録ファイルが共通理解に大変有効です。自分の、そして第三者からの「評価」に役立ち、保育者全体で共有しやすい形に整理するファイル作りはそのまま次年度以降に役立ち、仕事量増加だけではないと実感されています。



幼稚園の実態、教育内容、保育の進め方、課題などは、保育者間の共通理解と同時に「保護者と共通理解」されることが大切です。幼児の言葉や行動の変化を継続して文字写真で記録・整理するとそのままひとりひとりの成長の記録となります。

更に、毎月発行している「園だより」やホームページで保育の様子を紹介する際の貴重な材料になり、毎年担当がデータや記録をもとに、4月以降の成長の目立つ部分を記載して保護者にお渡しする「成長の記録」の基礎資料としています。家庭では気付かない順調な発達や肯定的な評価を受け取り、「わが子を見直しました。あれこれ注意を連発しがちだが、プラス評価の大事さを再認識しました。伸ばし方を少し変えたい」など感想を返してください。

客観的な記録、検討、評価の結果を第三者と広く共有することは、幼児教育へ人文科学、社会科学領域で「科学的なアプローチ」することに繋がり、国際的にわが国の幼児教育の現状、効果、質の検討や評価を増やし、改善策の策定に役立つことを期待します。

共通理解をしていく中での保育者の変化・成長

本園では「科学する心の育ち」につながる遊びや活動を3才から5才までの環境領域関連の年間指導計画の中に準備しています。毎年「教育課程」「指導計画」の点検、改善の際に見直してきました。

事例を出し合い、記録として残すことは手間取る作業ですが、見方や捉え方、考えを整理することで、反省や課題が具体的に増えてきました。その作業を繰り返すことで、保育者自身いろいろな角度からの子どもの気持ちの読み取りができるように成長したと感じられ、次のような変化がありました。

- ・園の研究テーマを意識して、保育者が子ども達の行動や仕草、言葉やつぶやきなどをじっくり観察するようになった。
- ・興味をもちそうな教材や、子ども達が想像や連想をしやすく、関連付けて考えそうなことを予想するようになった。
- ・保育者側の働きかけが多いと、活動が盛り上がりすぎず途切れることがある。子どもの主体性や子どもなりの考えを導き出すこと、それを抽出して活動に組み込むことの大切さが分かってきた。
- ・保育者が子どもと一緒に考え、様々な方法を用いて答えを探る過程を【楽しむ】ようになった。
- ・生活の中での小さな気付きや「あれ?」「何だろう?」「ふしぎ!」を掘り下げて考えるようになった。当たり前のことをもう一度考え、改めて見直し、新たな発見に繋がった。

課題の乗り越え方について

地域にいる様々な分野の達人との交流が、大きな刺激となり、専門知識の習得や学ぶ機会の増加、指導の方法や内容の改善へのきっかけとなりました。

姉妹園三園間で保育者の異動があるため、共通理解を引き継いでいく難しさがあり、取り組みの継続が課題でした。まず、幼稚園としてどのように『科学する心』を捉えるか、わかりやすく考えられるよう図式に表すことにより、子ども達の日々の姿の中に『科学する心』が溢れていると見取れるようになりました。今までの論文を読み返し、研究に携わっていた保育者が言葉で子ども達の様子を詳しく説明すること、子ども達の姿や変化を互いに伝え合うことを習慣化するようにしています。園外の研修に積極的に出掛け、園内研修の充実を行ない、自分の考えを言葉にし、相手の考えに耳を傾けて議論して共通理解を図っています。

実践提案研究会を開催することで、自分達のやってきたことの説明を通して、改めて見直し、園全体で更に深く共有することができました。平成14年度からソニー幼児教育支援プログラムに取り組んできて、園としてたくさんの気付き、学びをすることができました。これからも、子ども達の心に寄り添い、「科学する心を育くむこと」を意識して保育をしていきたいと思えます。

福島県SSTA(ソニー科学教育研究会)の小中学校の先生方のご指導、ご援助に心から感謝しています。